

(19)

氏名 (生年月日)	葉 晴 漪 ヨウ セイ イ
本 籍	
学 位 の 種 類	医学博士
学位授与番号	乙第110号
学位授与の日付	昭和45年11月20日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当 (博士の学位論文提出者)
学位論文項目	摘出子宮における Reserve cell の研究
論文審査委員	(主査) 教授 川上 博 (副査) 教授 今井 三喜, 教授 加藤 金吉

論 文 内 容 の 要 旨

緒言

子宮頸管円柱上皮下に未分化な細胞、いわゆる Reserve cell があり、この Reserve cell は上皮の再生、増生、過形成、癌化などと深い関係がある。

著者は、A) Reserve cell の高頻度にみられるところの Transitional zone の状態、それと年齢、子宮疾患、既往月経、びらん (肉眼的)、妊娠、分娩との関係、B) Reserve cell の出現頻度、出現部位、炎症細胞浸潤との関係、Reserve cell hyperplasia と年齢、子宮疾患、妊娠、分娩、Menopause との関係の解明を企図した。

研究材料と研究方法

東京女子医大産婦人科において、昭和40年から42年の3年間に、31~65才の患者に行なわれた腹式子宮単純全剝例のうち、癌を除く183例について観察した。これらの内訳は、子宮筋腫110例、子宮内膜症41例、子宮筋腫兼内膜症25例、子宮内膜増殖症7例であつた。これらのうち、臨床的に“びらん”の認められたものは118例、“びらん”のないものは65例であつた。

頸管前壁および子宮体部前壁を正中縦切開して、頸管および子宮体部内膜を肉眼的に観察した後、10%ホルマ

リンに固定、内子宮口の上方で水平切断し、頸部を放射状に、4コブロックに切り出し、パラフィン処理後、10枚毎の Step section で、5 μ に薄切し、染色した組織標本を製作した。

研究結果

1) 135例中、移行帯を有するものは82例、60.7%を占め、移行帯の平均長さは4.8~7.6mmで、最長13mmであり、その厚さは6~9層のものが最も多い。

2) 移行帯と妊娠、分娩との関係については、経妊婦と経産婦に高率にみとめられる。

3) Reserve cell の増殖は頸管粘膜表面のみでなく、腺管内にも侵入し、限局的にでも Reserve cell を発見できる場所は外子宮口から上方へ24.9 \pm 5.5mmの頸管粘膜の部分までで、頸管腺上皮では Reserve cell 発見できる部分は1.45~2.87mmの深さまでであつた。

4) 経妊婦および経産婦は未経妊婦よりも hyperplasia Reserve cell が多くみられる。

5) Reserve cell の出現したものに間質組織の小円形細胞浸潤が多い。

論 文 審 査 の 要 旨

本論文は子宮頸部の扁平・円柱上皮移行部、頸管粘膜および頸管腺における Reserve cell の発現頻度、発現範囲およびその増殖程度などを多数の摘出子宮について調査し、これらが妊娠、分娩、種々の婦人科疾患との間にいかなる関係があるかを検討したもので、子宮頸部における上皮の異型増殖ならびに子宮頸癌の発生過程を知る上に重要な意義を有するものと認める。

主論文公表誌

摘出子宮における Reserve Cell の研究

東女医大誌 40 (9) 633～ 643 (昭和45年)

副論文公表誌

1) 子宮内胎児感染の1例

東女医大誌 36 (10) 556～ 560 (昭和41年)

2) Methotrexate の使用経験 (特にその副作用につい

て)。

東女医大誌 38 (3) 184～ 189 (昭和43年)

3) 晩期妊娠中毒症とその後遺症。

東女医大誌 39 (3) 168～ 173 (昭和44年)

4) 高度の外陰所見を伴った Behçet 症候群の1例

東女医大誌 39 (12) 940～ 950 (昭和44年)